

種痘の碑

●米原恭庵頌徳碑（写真1）

米原恭庵（1828～1910年）は1849（嘉永2）年9月、石見国高角村（現 島根県益田市）で種痘を接種した“石見のジェンナー”とも言うべき人物である。1849年7月に、オランダのモーニッケから病痘を入手し、本誌2014年4月号で紹介した鍋島直正や笠原白翁が牛痘接種に成功した2か月後にあたる¹⁾。

益田市染羽天石勝神社境内に、黒みかげ自然石の“米原恭庵頌徳碑”がある。遺徳を偲ぶ青銅版の碑文には、“当時高角港は津和野藩港として殷賑を極めたが 反面悪疫病の流行も亦猛威を振り 特に天然痘の災禍は地方住民を苦しめた 恭庵は惨状を見るに忍びず 私財を投じ決然として全国に先駆け牛痘接種を断行しその防疫に献身した”と記されている。右側後方の碑は恭庵自ら業績を刻み建立したと言われる種痘記念碑である。遠隔の石見国へその新奇の法を取り入れた恭庵の学問に対する先取性と、種痘刀を模した石碑は、恭庵の心意気が顕揚される。

●長沢理玄種痘碑（写真2）

長沢理玄（1815～1863年）は元 山形藩主秋元家の藩医で、主君が1846（弘化3）年、上州館林に移封されたため館林に移った。奇しくも1849（嘉永2）年、理玄35歳の時に江戸に出て、本誌2014年1月号で紹介した桑田立斎から種痘術を習った²⁾。理玄については、郷土史家でもある石村澄江氏の著書「疱瘡長屋の名医 種痘に賭けた長沢理玄の生涯」に詳しい³⁾。

山形市の千歳公園は桜の名所でもあるが、その一角に、台座石の上に高さ2m余の稲井石を磨いて碑文が彫り込んである。その碑文の最後に、“子をおもふ親のまよひのあやしきはすくはるるをもちふなりけり”，“子のためをまことにおもふ親ならば牛のもかさをうえさらめやは”とある。難解な漢字



写真1 米原恭庵頌徳碑（益田市染羽天石勝神社）



写真2 長沢理玄種痘碑（山形市千歳公園）

ではなく、和歌を入れ、“子を思う親の迷い”の心情を理解し、“牛のもかさ”の接種を促す庶民への啓発を意図している。

■ 参考資料 ■

- 1) 諸澄邦彦，鍋島直正と笠原白翁，*Isotope News*, No.720, 55 (2014)
- 2) 諸澄邦彦，桑田立斎，*Isotope News*, No.717, 53 (2014)
- 3) 石村澄江，疱瘡長屋の名医 種痘に賭けた長沢理玄の生涯，あさを社 (2002)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕